

1-3

主題 105歳になっても自立した日常生活を目指す
利用者に対する支援サービス

利用者本位の支援サービス

副題 東村山市に最高齢者となった利用者と支援スタッフ
との信頼関係作りの実践

利用者との信頼関係

研究期間 12ヶ月

事業所 (社福) 東京蒼生会 養護老人ホーム 万寿園

発表者：川嶋 大輝 (かわしま ひろき)

アドバイザー：(任意) 氏名 (ふりがな)

共同研究者：中村・田中・吉岡・馬場

電 話 042-391-2578

メール manjuen@poppy.ocn.ne.jp

FAX 042-392-1733

URL http://www6.ocn.ne.jp/~sousei2/

今回発表の
事業所や
サービスの
紹介

養護老人ホームは行政の措置によって入所が決定される、いわゆる措置施設です。セーフティーネット機能を有する万寿園の支援サービスは、利用者にとって温かく、優しく、心にしみるものであって、「生きる」ことをしっかりと支えていくことを大切にしています。

《研究前の状況と課題》

当法人の理念は「お客様一人ひとりが自らのかけがえの無い人生の今を最大限に充実されることを支え得るサービスの創造と提供」である。この理念の実践は支援サービス計画に基づく個別ケアとして日常生活の中で行なわれている。利用者の K さんは105歳の高齢であり東村山市の最高齢者であるが、加齢による顕著な ADL 低下は見られず、一般的であるが、K さんは聴覚は少し弱くなってきたが、視力は良く、言葉も明確であり、自立度は高く、自分でできることは自分で行なう姿勢を堅持しまさに元気な高齢者と言える。この K さんに対し、私達が法人理念である「人生の今を最大限に充実する」ことをどのように施設サービスにおいて提供できるのか、各職種のチームケアの総力によって、老人ホームのマドンナである K さんに対する最大の個別支援を達成することを私達の実践課題とした

《研究の目標と期待する成果》

105歳の高齢でも「死ぬまで自立した生活を送りたい」と願って最大限の努力をしている K さんが健康で長生きを続けていけるように生活相談員、支援員、看護職員、栄養職員等のチームによるプログラム作りをより強固のものにし、人生の最終到達点の準備を含め、K さんが望む幸せの達成に向け具体的支援プログラムを作成し、利用者本位のサービスの実現を図るものである。

《取り組んだ課題》

【利用者】 Kさん 女性 (要支援2)
【生年月日】 明治 37 年 10 月 14 日(105 歳)
【入所日】 平成 11 年 7 月 9 日(当時 94 歳)
【主な既往歴】 腸閉塞(平成 21 年)
左大腿部頸部骨折(平成 20 年)
腰痛(平成 13 年)

入所当初より高齢であるが、人の世話にならぬようにと頑固なまでの信念を持ち、身の回りのことは出来る限り自身で行ない日々の生活を頑張っておられる。

《具体的な取り組み》

- ① 左大腿部頸部骨折、術後リハビリを終え退院。退院後は ADL 低下が見られ、各職種のプロジェクトチームを発足し、総力をあげてケアプランに取り組んだ。
- ② 各職種が連携し、Kさんの人生の今を最大限に生きることを支える支援として、食生活、医療ケア、生きがい活動を充実させる為に取り組んだ。
- ③ 「人の世話になりたくない。もったいない。」との考えから支援プランの実践には時間を要したが、本人の思いをくみ取り、本人の人生を生きるという力を基本にケアを組み立てた。
- ④ Kさんの日々の生活が職員の利用者支援への教本となっている。

《取り組みの結果と評価》

- ①日々の観察により予測できる事故に対しては最小限のリスクに留めることができた。本人の強い意思もあり、リハビリ等行ない、歩行できるまでに回復した。
- ②食思低下を防ぎ体力を維持することができた。Kさんの行き届かない部分を支援することによって、本人の希望に沿った生活を送る事ができた。
- ③Kさんの生活は、施設で生活されている利用者の相談援助の際に生活そのものを観ていただくことで生きる手本となっている。

《まとめ》

ご本人が望む「死ぬまで人の世話にならずに頑張りたい」という強い信念のもと、いつまでサポートが出来るかは誰にも予測がつかないが、一日一日懸命に“生きている”氏の姿は他利用者にとっても励みになり目標になっているのは確かだ。私たち職員は Kさんへの支援を通して、自分達の人生の歩むべき道も学ばせていただいている。

現在は日々頑張って生活されている Kさんであるが、ADL 低下はさけることはできない。しかし私たち職員一同、Kさんが望む生活を送る事ができるよう全力で支え、当園が終の棲家になったとしても、少しでも潤いのある生活ができるよう支援していく。

《提案と発信》

105歳を現役で頑張っておられる Kさんは、持ち前の頑固さがあるがゆえに幾多の苦難を乗り越えて現在の生活がある。支援は本人の頑固さとの戦いでもあったが、私たちは本人の「生きる」という最大限の気持ちを尊重して支えてきた。Kさんは利用者に対し、私たちに対し生きることの大切さを示してくれた。未来に向かって積極的な態度を取ることで高齢者でも心理年齢を若々しくしてくれることを学んだ。

【メモ欄】